追悼

「君、すまんけどね」の言葉に導かれて

北川治男

大澤俊夫先生のご生涯は、戦後におけるわが国の教育に独自の役割を担ってきた学校法人廣池学園および財団法人モラロジー研究所の歴史とともにあり、その歴史の形成にかけがえのない足跡を残された類まれなご一生であったと思います。

大澤先生は、戦後、軍務を終えるとすぐ、恩師・廣池千英先生の付託に応えて廣池学園に戻られました。その後、京都大学ご卒業と同時に、麗澤高等学校を皮切りに、麗澤短期大学、麗澤大学において教鞭を執られ、多くの学生生徒に愛され、人格的感化を与えられました。その間、常に麗澤教育の充実と発展に意を用いられ、定年退職後にいたって、麗澤大学国際経済学部の創設に中心的な役割を果たされました。

傍らモラロジー研究所の出版活動、研究活動、社会教育活動にも深い関わりを持ち続け、数々の業績を残されました。出版活動においては、『道徳科学の論文』『廣池博士全集』『廣池千九郎日記』などモラロジーの原典類の刊行、『道徳科学（モラロジー）および最高道徳の概要』『モラロジー概説』など社会教育用テキスト類の刊行や改訂、『モラロジー研究所所報』『社会教育資料』など機関誌の発行等を手がけられました。

研究活動においては、廣池千九郎生誕百年記念事業として、廣池博士のモラロジー以前における東洋法制史など専門学の再評価と顕彰の仕事に取り組まれ、専門学者の協力を得て大きな業績を残されました。「小説廣池千九郎プロジェクト」にも関わられ、資料提供や取材の支援を通じて山岡荘八著『燃える軌道』（全五巻）の完成に陰に陽に誠意と力を傾けられました。およそ十年にわたる研究部部長時代には、廣池博士の膨大な未公開資料の保存・解読・整理について高い見識に基づくリーダーシップを発揮され、廣池千九郎研究の基礎を築かれました。また、京都大学名誉教授・下程勇吉先生、同志社大学名誉教授・内田智雄先生をはじめとする国の内外の学者を多数招聘され、若手研究員の育成に力を注がれるとともに、モラロジー研究の国際化・現代化を推進されました。

社会教育活動においては、公私にわたって犠牲的努力を惜しまず、全国のモラロジー会員との深い信頼関係を築かれ、特に青年の育成と教育者の開発に力を注がれました。また平成三年には、モラロジー研究所の人材養成機関としてモラロジー専攻塾を開設され、初代塾頭をお務めになりました。

私が初めて大澤先生の謦咳に接したのは、麗澤大学における「道徳科学」の授業においてであったと思いますが、四年次の時、「教育哲学」の授業でジョン・デューイの『民主主義と教育』をご講読いただいたことが、私にとって生涯を方向づける決定的な出会いとなりました。大学卒業後もさらに六年間、先生から度重なるご指導をいただきながら、教育学の分野で学究生活を続けることになりました。その間、大妻女子中高等学校の非常勤講師としての仕事をご紹介くださるなど、温かく力強いご支援は、忘れることができません。そんな愚鈍な私を、昭和四十七年にモラロジー研究所研究部教育研究室（細川幹夫室長）に受け入れてくださったのは、大澤研究部長のお計らいでした。

「君、すまんけどね」というのが、大澤先生が仕事を命じてくださるときの口癖です。研究所に奉職させていただいた直後の五月に結婚式を迎えた私たちの披露宴に、大澤部長はわざわざご列席下さり、雛壇の私に盃を勧めながらおっしゃった「君、すまんけどね」は、私にとって初仕事のご下命でした。京大の先輩であられた大阪大学人間科学部の森昭教授のご紹介で、ドイツのチューービンゲン大学の教育学者、O・F・ボルノウ教授を研究部でお迎えすることになったので、その準備を進めよということでした。秋には、麗澤大学ドイツ語学科の落合亮一先生や小田川方子先生のご協力を得て、ボルノウ教授との懇談会や研究会、そして「対話への教育」と題する講演会が行われ、大きな感銘を受けました。

その後、大澤部長は、矢継ぎ早に、世界的に著名な教育学者を研究部に招聘されました。私が直接お目にかかる機会を得た方だけでも、オランダの元ユトレヒト大学教授、M・J・ランゲフェルド先生、ドイツのボン大学教授、J・デルボラフ先生、英国のロンドン大学名誉教授、J・A・ラワリーズ先生、フランスの元ユネスコ成人教育課長、ポール・ラングラン教授などを挙げることができます。これらの先生方と、送迎の車に同乗させていただき、日光などへご案内させていただきながら、不十分な英語で汗をかきかき、お話を交わす機会に恵まれ、そのお人柄に親しく接することができたのも、すべて大澤部長の「君、すまんけどね」のおかげです。

大澤先生は、研究部長にご就任の直後から、京都大学名誉教授の下程勇吉先生など、その道の大家を積極的に招聘され、研究の便宜を図ってくださいました。これら内外の専門家の招聘は、私たち研究部員に一流の学者の知徳に触れさせ、モラロジーの学問的発展や国際化の基礎を築こうとされた大澤部長の慧眼であったと、今にしてつくづく有り難く思う次第です。特に自らの恩師でもあられた下程先生を研究顧問としてお

迎えになり、先生が亡くなられた後にも、師に対する誠を貫かれた徹底した報恩のお姿は、人の道の何たるかを無言のうちに示して下さったように思います。

私にとって、のっぴきならぬ「君、すまんけどね」は、「イギリスの道徳教育について調べに行ってもらいたい」でした。家族を伴っての恵まれたロンドン留学の機会をいただいたのです。押っ取り刀で出かけた一年目は、語学研修中心、二年目は、ロンドン大学教育研究所で学びました。当時の英国における宗教教育の動向ということを中心テーマに、伝統的なキリスト教教育が、大量の移民の流入による多民族・多文化社会の下で、宗教多元主義的なアプローチをとり、広く人間的な価値の教育へと大きく変貌していく状況について学ぶことができました。

留学中の特筆すべきことは、昭和五十三年四月に、ブルガリアの首都ソフィアで開かれたユネスコ主催「現代生活の要請に鑑みた教育制度と道徳教育に関する専門家会議」に参加された、廣池千太郎所長と大澤研究部長に同行を許されたことです。そこには、平塚益徳先生（国立教育研究所所長）やラワリーズ先生、そして麗澤大学から国立教育研究所へ出向中の小泉喜平先生も参加しておられました。道徳教育に関するユネスコでの初めての国際会議で、廣池千太郎所長が、モラロジーおよびモラロジー教育について英語で紹介されたときの誇らしい気持ちは、今でも鮮明に蘇ってきます。その原稿は、大澤部長が研究部基礎理論研究室（水野治太郎室長）に作成を求め、持参されたものと伺いました。

この国際会議に、廣池千太郎所長より同道を求められた大澤部長は、はじめ語学力不足を理由に固辞しておられたそうです。それを翻意させたのは、千太郎先生の「僕も大したことないよ。二人で一人、一緒に行こう」の言葉だったとのこと。そのとき、昭和四十三年に廣池千英所長の跡を継がれた千太郎先生のご就任

第一声が「モラロジーの国際化」であったことを思い合わせ、心底を揺すぶられて、ついていくことになったとのお話を伺ったことがあります。思えば、先生は、千太郎先生の終焉の地、ブータン王国のパロにも同道されました。このエピソードをお聞きして、終始、精神伝統のお心を第一義にして歩んでこられた、大澤先生の縁（えにし）を感じざるをえませんでした。

　留学中のもうひとつの重い「君、すまんけどね」は、ハンブルグのユネスコ教育研究所で行われ、ポール・ラングラン先生が座長を務められた「生涯教育の基礎としての学習の諸領域」と題する研究プロジェクトに参加するよう仰せつかったことです。留学中で知る由もありませんでしたが、ソフィアでのユネスコの会議でモラロジーが紹介されたのを受けて、倫理的領域を担当する専門委員をモラロジー研究所より派遣するようにとの要請があったとのこと。私自身は、重圧に打ちひしがれて、ラワリーズ先生のご指導でやっと提出論文をまとめ、昭和五十三年十一月と翌年九月に行われた二回にわたる会議で何とか役割を果たすことができたのでした。その間に一度、パリのユネスコ本部に服部英二先生を訪ね、先生から、西欧の個人主義とは異なって個人の人生を竹の一節のように生命の連続性において捕らえる日本の生命観を紹介するのが有効だとのアドバイスを得たことも懐かしい思い出です。

　とにかく「君、すまんけどね」という言葉には、人を動かす不思議な力が潜んでいました。大澤先生は、常に学祖・廣池千九郎博士の建学の理念と真正面から対峙され、モラロジーの学問的発展や国際化という今日的課題を達成する方途を求めて、次々と重要な事業に取り組まれました。その使命を後進に伝え、信頼して仕事を任せ、人材を育てたいという、先生の明確な意思と思いやりが、その言葉に込められていたからかもしれません。大澤先生の、若者を凌ぐ理想主義的精神の前に、中途半端にプラグマティックな私はいつも

たじろぐばかりで、ご厚誼の万分の一にもお報いすることができず、申し訳ないことです。

全国で身を挺してモラロジー教育活動に取り組んでおられる、モラロジアンの皆さんに対する深い尊敬の念と、温かい激励と慈しみのまなざしも、大澤先生のお人柄の真髄をなしていたように思います。「君に高知の吉田松陰を紹介するから、土佐の青年たちの勉強会に参加させてもらいなさい」というのが、私の人生を変えたもうひとつの「君、すまんけどね」でした。昭和五十年当時、高知県西部モラロジー支部の支部長であられた石元貢先生の下に、今は亡き井上勅男氏を中心とする青年リーダーの兵（つわもの）たちが集い、活発な活動を展開しておられました。石元先生のご指導で、隔月に土佐にお訪ねし、学祖晩年の著作を中心に勉強することになりました。石元先生は、三十歳半ばの若造の話を、青年の皆様と一緒に聴いてくださいました。勉強会を土曜日の夜に設定して、翌日は朝から二人一組になって街に出て、『ニューモラル』誌を配布しながら、その夜に座談会の会場を提供してくださるお宅を開拓してくる。そして手分けしてお話に伺うという教育活動も体験させてもらいました。中村市や宿毛市にも足を運んだことは、忘れ得ぬ思い出です。石元先生と青年リーダーの皆様との出会いを通して、私は、モラロジアンの皆様が精神伝統に奉仕報恩される至誠心が、いかに篤いものであるかを学ぶことができました。これも大澤先生のお導きのおかげです。

私事にわたりますが、ロンドン留学中に妻の父親を亡くし、一時帰国を余儀なくされることがありました。その時、大澤先生には実に細やかなご配慮をいただき、身に余るお世話になりました。委細を述べる紙幅はありませんが、学祖の「粘りつくような慈悲」とは、このようなことをいうのであろうと感激し、お礼を述べますと、「僕も、千英先生にしてもらったことを、君にして返しただけだよ」という、さりげない言葉が返ってきました。思えば、その時まで、私は精神伝統のご恩の存在を実感するまでには至っていません

でした。

大澤先生は、かけがえのない奥様を亡くされ、御霊を焼津の菩提寺にお祀りになるに際して、新しく建立された墓碑の銘に「日孜孜」という言葉を選ばれました。歴代の精神伝統への奉仕報恩の念を基軸にして、まっしぐらに歩んでこられた大澤先生のご生涯を表現する、これ以上の言葉はないでしょう。共に生きる指針として、この言葉を、奥様とも完全に共有されていたであろう先生のお幸せを思い、今はすべてを分かり合えたよき伴侶の奥様と、苦楽をともにした日々を語らい、心穏やかな日々をお過ごしのことと拝察申し上げる次第です。

もはや「君、すまんけどね」という先生のお声の響きを聞く事はできませんが、そこに込められた深い慈愛のお心に感謝し、それを導きの糸として牛歩の歩みを続けたいと願っています。（本稿は、『大澤俊夫先生傘寿記念文集』（平成十七年二月三日発行）所収の拙稿に加筆したものです。）